

母親の養育行動が娘の予期的養育行動に 及ぼす影響について

The influence of mothers' bringing-up behavior on their daughters' anticipation of bringing-up behavior

横 張 梓

【問題】

近年、児童虐待はその報告件数が増加傾向にある。厚生労働省によると、2006年度に全国の児童相談所に対応した児童虐待相談対応件数は37323件で、統計をとり始めた1990年度の1101件の約34倍となっており、年々増えていることがわかる。そのことは、心理的に深く強い繋がりを持っていると考えられてきた“家族”が、その関係に何らかの問題を抱える対象として関心を向けられるようになってきたことを示唆している。

さて、児童虐待の背景には、家庭の経済状態、地域との関わり、家族構成、配偶者のサポートなどさまざまなものが考えられている(中嶋;2004、山野;2008)。その中の一つに挙げられているのが、虐待をしてしまう親自身の被虐待経験である。虐待の発生要因として母親の被虐待経験をあげている研究は少なくない(西澤;1994、武田;1998)。つまり、子どもの頃に虐待を受けた経験のある親は、自分の子どもに虐待行為を行う可能性が高いのではないかと考えられているのである。このことは、“虐待の世代間伝達”と呼ばれている。しかし、虐待を受けた経験あるから、自らの子どもにも虐待をしてしまうとは、単純には言えないであろう。被虐待経験があっても、子どもに対して虐待行為に至らない親がいることもまた事実であるからである。棚瀬

(1996)では、虐待の発生要因として、母親自身の被虐待経験あるいは何らかの剝奪体験、子どもに対する認知的歪曲、限界を超えた危機状況の存在、社会的援助の欠如の4条件が揃う必要があると指摘されている。では、被虐待経験のある親が、虐待行為に至るか、至らないか、その違いはどこにあるのであろうか。

西澤(1994)は、その著書の中で「虐待の再生産という悪循環を生じなかった親たちについて詳しく知ることによって、虐待ケースへの適切な治療的介入の方法が明確になるかもしれない」と述べている。また、木本・岡本(2007)も、その研究の中で「被虐待経験を持ちながらも、虐待の連鎖を断ち切った親たちがどのようにしてそれを可能にしたのか。それを知ることによって、虐待傾向を示す親に対する適切な介入方法の手がかりを得ることができるのではないだろうか」と指摘している。これらのことから、未だ解明されていない虐待の世代間伝達メカニズムについて検討することで、子育てに不安や問題を抱えるケースへの介入方法に何らかの示唆を与えるのではないかと考えた。

(1) 世代間伝達に関する研究

木本・岡本(2007)によると、被虐待相当経験を持つ母親の方が、被虐待相当経験を持っていない母親よりも虐待相当行為を生じ

させている確率が2.5倍以上であった。これまでの臨床事例における虐待の世代間伝達率は、Kaufman&Ziegler (1987) がそれまでの研究を概観して述べた数字で30%前後、児童虐待調査研究会 (1985) によると約20~34%、全国児童相談所における家庭内虐待調査 (1997) では23.1%と、20%を超える数字が出ている一方で、東京都福祉保健局 (2000) では9.1%と低い数字になっている。また、臨床事例ではなく、一般人口における研究では、中嶋 (2000) で20%、木本・岡本 (2007) で45.95%、中谷 (2002) で50%となっており、世代間伝達率は幅広く、一定の結論は未だ得られていない。

このことは、和田 (2001) が、その著書で述べているように、世間の常識から見て異常と認められるような養育行動であっても、過失事故に至るようなケースを除けば、そのような育てられ方をしていた子どものほとんどが、別段、心の病に陥ることなく、正常な大人になっている点にもやはり注目しなければならぬことを示唆しているのではないだろうか。したがって、本当に虐待の連鎖は起こりやすいのかということには、疑問が残る。

このような虐待の連鎖は、親が「自らも虐待を受けてきたので、自分も子どもに虐待をする」と意識して行っているとは考えにくく、たいていが無意識のうちに、自らが受けてきた虐待の関係を、自分の子どもに対しても繰り返していると考えられる。

そこで本研究では、虐待のような子どもへの拒否的、攻撃的な養育行動を含め、人が自身のさまざまな養育行動を決める際に、過去に受けたさまざまな養育行動に、無意識のうちにどの程度影響を受けているのかということについて着目し、養育行動というものが形成される過程の一側面について考えていくことにした。なお、これまでの研究では、養育態度および養育行動について、区別や定義が

されているものはないが、一般に態度とは、認知的側面・感情的側面・行動的側面が含まれており、本研究においては、特に養育態度の中の行動的側面に注目し、研究を進めることにした。(以下、養育行動と養育態度という言葉については、先行研究の本文中に使われている言葉に合わせている)。

これまでの世代間伝達に関する研究では、ある世代を対象に、その世代が過去に受けた養育体験について、どのように認知していたか、そしてその認知が子どもへの養育行動にどのように影響しているかという、一つの世代の親の養育行動に対する意識的な認識と、その世代の子どもへの養育行動を関連付けて考えているものが多い (中谷; 2002、木本・岡本; 2007、原田; 2008)。橘 (2000) は、ある世代の過去の養育体験に対する認知と自身の養育態度に対する評価に、その子どもの養育態度認知を加え、二世帯を調査対象として検討しており、さらに養育態度の世代間伝達のメカニズムについて踏み込むために、親世代の被養育体験の処理過程という内的過程にも焦点をあてている。この研究によると、親世代の被養育体験におけるそれぞれの親の養育への評価と、それに基づく意識的な方針の形成には意味がある繋がりがあっても、意識的な方針と実際の行動とは、行動の側面によって、一致したり食い違ったりするとある。この一致や食い違いが起こるというところに、無意識のうちに受けている親の養育行動の影響があると考えられる。

また、この研究では、親が子どもに情緒的支持をする養育態度については連続的な伝達のみられ、感情的統制の養育態度では、連続的な繋がりはみられなかったという結果が得られており、このことから、養育態度の世代間伝達には、伝達されやすい養育態度と、伝達されにくい養育態度がある可能性が考えられる。これは、養育行動の世代間伝達についても、同様の予測が可能であろう。

しかし、世代間伝達のメカニズムについては、トラウマや愛着の問題など、さまざまな仮説があげられているが、未だ解明には至っていない（奥山；2007）。

(2) 養育行動の規定因に関する研究

そもそも、養育行動とはどのように形成されるのであろうか。また、どのような要因によって規定されるものなのであろうか。

遠藤ら（1991）は、その研究のなかで、養育行動を規定する要因として母親の生育歴、あるいは母親の幼児期の自分の親との関係をめぐる記憶や感情といった母親自身の生育歴に関わる要因、出産に関わる要因、育児環境に潜在するストレスやサポートなどの社会的文脈的要因などを挙げている。特に、母親の生育歴に関する要因については、Bowlby（1969、1973、1980）の愛着理論の、乳幼児期からの具体的経験を通して徐々に内在化される、愛着対象と自己に関する“内的作業モデル”（internal working model）を、子が親となった時に養育行動の基礎に仮定し、この過去の被養育経験を基礎とする内的作業モデルが、自らの子どもとの関係において、子どもが送る愛着シグナルの知覚、評価、さらに自分の母性的関わりのプランニングに使用され、結果的に、そこに親子関係の世代間伝達（intergenerational transmission）が生まれるという考え方を取り上げ、養育行動を規定する要因の一つとして、母親自身の生育過程における親との関係という要因を無視して考えることができないことを示唆している。また田淵（1993）は、その研究の中で、母親の養育態度に影響を及ぼす要因として、過去に親から受けたしつけの認知を見出している。

これまでに述べてきた、世代間伝達の研究において、過去に受けた養育態度および行動に対する認知と自身の実際の養育行動に関連性が認められていることから、親の養育行動と、その子どもがとる養育行動にも関連性が

みられるのではないかと考え、次に述べることを本研究の目的とした。

【目的】

本研究では、養育者の養育行動はその子どもの養育行動に関連性があるという仮説のもと、虐待のような攻撃的・拒否的な養育行動だけではなく、養育者のさまざまな養育行動が、その子どもが将来養育者となった際にとると予測される予期的養育行動にどのような影響を及ぼすのか、親子間で養育行動にどのような関連性があるのかということについて検討することを目的とした。

本来であれば、既に子どもの養育を経験している二世帯を調査対象にすべきところであるが、サンプル数の問題から、本研究では、大学生とその親を調査対象とし、大学生については、予期的養育行動を取り上げて検討することにした。また、養育者と子どものあらゆる組み合わせのうち、より関係が密であり、より養育者の影響を受けやすいと考えられる“母-娘”を取り上げ、女子大学生とその母親を調査対象とした。

さらに本研究は、養育態度の世代間伝達のメカニズムについて知見を得るための第一段階と位置づけており、養育者に対する養育行動認知および評価については取り上げずに、養育者の養育行動とその子どもの予期的養育行動という行動的側面のみを測定し、比較、検討した。

【方法】

(1) 調査対象

北星学園大学の女子学生 201 名（平均年齢 20.11 歳）とその母親 84 名（平均年齢 50.39 歳）

(2) 調査期間

2007年10月15日～26日

(3) 調査方法

講義中に女子学生に女子学生用の質問紙と母親用の質問紙を配布し、女子学生用の質問紙については、その場で回答させ、記入後に回収した。母親用の質問紙は持ち帰ってもらい、母親に回答を依頼、回答後に切手を貼った同封の封筒に質問紙を入れて返送するよう依頼した。なお、この質問紙には、それぞれの母娘のペアがわかるように、質問紙の表紙にIDをつけた。

(4) 質問紙の構成

女子学生用

- ①フェイスシート（年齢）
- ②きょうだい構成
- ③きょうだいの養育行動の違い（有無・内容）
- ④将来子どもを持ちたいか（2件法）
- ⑤養育行動尺度36項目

「1. しない～5. する」の5件法

母親用

- ①フェイスシート（年齢）
- ②結婚暦
- ③子どもによる養育行動の違い（有無・内容）
- ④養育行動尺度36項目

「1. しない～5. する」の5件法

養育行動尺度

養育行動は、時代により変化することが考えられるため、養育行動を測定する独自の尺度を作成するために、予備調査1を行った。予備調査では女子大学生を対象にこれまでに受けてきた養育行動について自由記述で回答を求めた。そして、そこで得られた回答61項目を質問形式に直し、予備調査2をおこなった。予備調査2では北星学園大学の女子学生177名に5段階で評定させ、主因子法・プロ

マックス回転の因子分析を行った結果、6因子36項目が抽出され、この36項目を本調査において使用する養育行動尺度とした（表1参照）。なお、質問紙の構成にある女子学生のきょうだい構成（被調査者の出生順位）、将来子どもを持ちたいと思うか、そして母親の結婚暦について分類をして、母娘間の関連性を比較することを考えていたが、回答数に偏りがみられ、その数が10人に満たないものもあるため、本研究では、これらの項目についての比較、検討は行わなかった。

【結果】

これ以降は、女子学生を単独で取り上げる際には「女子学生」、母親との関連性について取り上げる際には「娘」と表記した。

(1) 養育行動尺度の因子構造

母娘間の養育行動を比較するにあたり、養育行動尺度36項目に対する反応傾向を示す因子構造に、母娘間における共通性が見られたならば、その共通因子については母娘間の養育行動の比較ができると考えた。しかし、時代ごとの社会的背景や、実際に養育を行ったことがあるかどうかなどの違いから、養育行動尺度の因子構造が女子学生と母親では異なっている可能性も考えられるため、まず初めに、両者の養育行動尺度に対する反応傾向を把握するために、女子学生と母親の養育行動尺度について別個に因子分析を行った。

① 女子学生の養育行動尺度の因子構造

養育行動尺度36項目について主因子法・プロマックス回転による因子分析を行い、その固有値の減衰状況から6因子が抽出されると判断し、再度6因子解を仮定した主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った（表2参照）。その結果、事前に調査した際とは因子内の項目は多少異なっていたが、その

表 1 選定された養育行動尺度 36 項目の因子分析結果 ($\alpha = .768$)

質問項目	I	II	III	IV	V	VI	α 係数
第 I 因子 <ネガティブな行動因子>							
37. こどもに八つ当たりをする	.847	-.047	.086	-.077	-.043	.089	.814
30. こどもに矛盾したことを言う	.685	-.108	.042	.204	-.060	-.049	
41. こどもの話を受け流す	.641	-.099	-.101	-.167	-.088	-.015	
43. 自分のことを棚に上げてこどもには注意する	.574	.018	-.185	-.052	-.036	-.011	
31. こどもに口うるさく言う	.554	-.034	.148	-.088	.228	.096	
40. こどもに愚痴を言う	.511	.196	-.045	-.066	-.103	.057	
38. こどもの友人について評価する	.476	-.015	.067	.248	.077	-.050	
32. こどもの外見や言動に否定的な態度をとる	.475	.098	-.215	.184	.047	-.072	
第 II 因子 <しつけ因子>							
60. こどもに責任を持つということを教える	-.059	.781	-.041	-.003	.015	-.058	.777
58. こどもに礼儀作法をきちんと覚えさせる	-.031	.746	.096	-.101	.052	-.097	
59. こどもには苦手なことでも挑戦させる	.071	.572	-.097	.046	-.132	.148	
54. こどもに習い事を習わせてあげる	.112	.546	.120	.034	.014	-.126	
52. こどもには常識ある行動を教える	.022	.521	.014	-.129	.089	.118	
61. こどもに好き嫌いさせないようにする	-.100	.460	-.156	-.008	.168	.072	
12. 駄目な所は指摘する	.001	.451	.004	-.076	-.044	.152	
53. こどもに必要以上に干渉しないようにする	.017	.430	-.102	.057	-.166	.150	
57. こどもが何でも話せるような環境を作る	-.012	.424	.202	.121	-.152	.068	
第 III 因子 <こどもに積極的に関わる行動因子>							
4. 買い物などに一緒に出かける	.173	-.094	.780	-.074	.029	.043	.763
11. 色んなところに連れて行く	-.034	.163	.633	-.023	.031	-.169	
47. こどもと関わらないようにする	.166	.133	-.580	.149	.064	-.056	
3. こどもが落ち込んでいるときには気遣う	.044	-.013	.558	.089	-.055	.138	
25. 誕生日などは欠かさず何かをする	-.060	.045	.504	.071	.086	-.116	
26. 同じ趣味を持って一緒に楽しむ	-.086	.024	.457	.265	.017	-.022	
2. こどもの話をいつでも何でも聞く	-.160	-.021	.424	.040	.041	.221	
第 IV 因子 <こどもの要求に応える行動因子>							
17. こどもの欲しがる物は何でも買ってあげる	-.040	-.064	-.132	.862	.133	.006	.694
13. 何でもしてあげる	.068	-.058	.061	.725	.051	.078	
7. こどもが欲しがる時にはお金をあげる	.048	-.046	.104	.638	-.105	.068	
55. こどもと友人同士のような関係を築く	-.065	.202	.080	.335	-.217	-.104	
第 V 因子 <統制・干渉的行動因子>							
34. 外泊を禁止する	-.061	-.028	.016	-.061	.659	.066	.673
33. 門限を決める	-.029	.041	.077	.060	.638	-.032	
36. こどもに対しては何事にも厳しくする	.131	.084	-.116	.092	.583	.039	
42. こどもの一人暮らしには反対する	-.091	-.138	.020	.010	.410	.063	
39. こどもに勉強しなさいと言う	.280	.154	.120	-.115	.324	-.083	
第 VI 因子 <受容・支持的行動因子>							
19. こどものどんな所でも受け入れる	-.143	.099	-.099	.037	.144	.617	.596
18. こどもの考えを尊重する	.055	.146	.090	.045	.018	.566	
16. こどもに良いことも悪いことも話す	.166	.028	.075	.046	-.037	.481	
固有値	3.538	3.524	3.343	2.476	2.140	1.574	
説明率 (%)	12.225	10.143	6.043	4.969	3.600	2.749	39.730

因子相関行列	I	II	III	IV	V	VI
I						
II		.020				
III			-.197			
IV				.049		
V					.278	
VI						-.100

質問内容については同様の結果が得られた。このことから、表1と同じ因子名をつけ、第Ⅰ因子は「ネガティブな行動因子」、第Ⅱ因子は「子どもに積極的に関わる行動因子」、第Ⅲ因子は「しつけ因子」、第Ⅳ因子は「統制・干渉的行動因子」、第Ⅴ因子は「受容・支持的行動因子」、第Ⅵ因子は「子どもの要求に応える行動因子」とそれぞれ命名した。

因子間相関は、ネガティブな行動因子と子どもに積極的に関わる行動因子の間で低い負の相関が ($r = -.346$)、ネガティブな行動因子と統制・干渉的行動因子 ($r = .274$)、しつけと統制・干渉的な行動 ($r = .367$) の間に低い正の相関がみられた。また、子どもに積極的に関わる行動と受容・支持的行動の間にはやや高い正の相関がみられた ($r = .503$)。

② 母親の養育行動尺度の因子構造の検討
母親についても女子学生同様、養育行動尺度36項目の主因子法・プロマックス回転による因子分析を行い、その固有値の減衰状況から6因子が抽出されると判断し、再度6因子解を仮定した主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った(表3参照)。その結果、第Ⅰ因子は質問項目が異なるものの、その内容は女子学生の第Ⅰ因子と同様のものであったため「ネガティブな行動因子」と命名した。第Ⅱ因子は、「子どもには常識ある行動を教える」というようなしつけ行動と、「子どもが落ち込んでいるときには気遣う」という子どもの状況によって配慮をするような行動を示す項目であることから「しつけと配慮因子」と命名した。第Ⅲ因子は、「子どものどんな所も受け入れる」、「外泊を禁止する」という矛盾した内容になっていたが、これらを子どもといつも近くでつながってほしい、常にお互いの全てを理解してほしいという意識から起こる行動であると解釈し、「子どもとの距離を近づける行動因子」と命名した。第Ⅳ因子は、女子学生の第Ⅳ因子と同様の項目であったた

め「統制・干渉的行動因子」、第Ⅴ因子は、女子学生の第Ⅱ因子と同様の内容であったため「子どもに積極的に関わる行動因子」、第Ⅵ因子は女子学生の第Ⅵ因子と同じ項目が示されていたため、「子どもの要求に応える行動因子」と、それぞれ命名した。

因子間相関は、ネガティブな行動と統制・干渉的行動 ($r = .251$)、子どもとの距離を近づけようとする行動と統制・干渉的行動の間に低い正の相関がみられた ($r = .288$)。また、しつけと配慮と子どもの要求に応える行動の間に低い負の相関がみられた ($r = -.314$)。

①および②の結果から、女子学生の養育行動尺度と母親の養育行動尺度との間には、因子内で共通する項目もあれば、共通しない項目もあり、一定の規則的な共通性は見られなかった。したがって、女子学生の養育行動尺度と、母親の養育行動尺度の因子構造は異なっていると判断した。

(2) 母娘間の養育行動の関連性

母親と女子学生の養育行動尺度の因子構造は異なるものであることが判明したことから、両者の養育行動の各因子をそれぞれ独立したものと捉え、母親の養育行動が、娘の予期的養育行動にどのように影響を与えているのかということについて、母娘の回答が揃っている84組を対象に重回帰分析を行うことにした。この分析を行うために、母娘の養育行動尺度のそれぞれの因子ごとに、因子負荷量が.30未満の項目を除外した尺度得点を求めた(表4参照)。

娘の尺度得点を従属変数、母親の尺度得点を説明変数として、娘の6尺度それぞれについて、強制投入法の重回帰分析を行った(表5参照)。

その結果、娘のネガティブな行動には、母親のネガティブな行動の正の影響 ($\beta = .345$, $p < .01$)、および統制・干渉的行動の負の影響がみられた ($\beta = -.297$, $p < .05$)。次に、娘

表3 母親 (N=84) の養育行動尺度の因子分析結果 ($\alpha = .770$)

質問項目	I	II	III	IV	V	VI	α 係数	
第I因子 <ネガティブな行動因子>								
15. こどもに矛盾したことを言う	.630	-.085	.263	.052	-.116	.090	.775	
9. こどもの話を受け流す	.610	.015	-.209	-.084	-.047	.110		
3. こどもに八つ当たりをする	.604	.051	.129	-.110	.125	.105		
36. こどもに口うるさく言う	.547	.084	.066	.269	-.012	.150		
21. 自分のことを棚に上げてこどもには注意する	.546	.116	.080	-.100	-.023	.034		
30. こどもの考えを尊重する	-.542	.088	.246	-.070	-.091	.208		
14. 駄目な所は指摘する	.541	.166	.340	.015	-.028	-.111		
31. こどもの話をいつでも何でも聞く	-.505	.041	.385	.081	.037	.090		
4. こどもに対しては何事にも厳しくする	.423	-.134	.061	.192	.148	-.283		
27. こどもの外見や言動に否定的な態度をとる	.292	-.116	.046	.200	.075	.131		
33. こどもに愚痴を言う	.264	-.017	.171	-.084	-.137	.215		
第II因子 <くしつけと配慮因子>								
18. こどもには常識ある行動を教える	.122	.833	.032	.048	.090	.099		.715
5. こどもに責任を持つということを教える	.089	.632	-.103	.052	-.007	-.074		
19. こどもと関わらないようにする	.051	-.530	-.025	.029	-.026	.143		
13. こどもが落ち込んでいるときには気遣う	.010	.521	-.089	.179	-.059	.030		
2. こどもが何でも話せるような環境を作る	-.101	.476	-.046	.028	.273	-.147		
第III因子 <こどもとの距離を近づけようとする行動因子>								
35. こどものどんな所でも受け入れる	.056	-.067	.754	-.151	.014	.112	.605	
24. こどもに良いことも悪いことも話す	.170	.067	.489	.051	-.042	.006		
32. こどもには苦手なことでも挑戦させる	-.122	-.183	.438	.226	.158	-.220		
8. こどもに好き嫌いさせないようにする	-.024	-.039	.304	.224	-.006	-.239		
10. 外泊を禁止する	.069	-.054	.300	.263	-.062	-.110		
第IV因子 <統制・干渉的行動因子>								
29. こどもの一人暮らしには反対する	-.274	.162	-.036	.740	-.142	.239	.647	
17. 門限を決める	.137	-.017	.156	.625	-.104	-.112		
23. こどもに勉強しなさいと言う	.197	-.006	-.049	.466	.019	.131		
26. こどもに習い事を習わせてあげる	-.055	.100	-.039	.383	.173	.070		
12. こどもの友人について評価する	.246	.081	-.107	.333	-.028	.106		
11. こどもに礼儀作法をきちんと覚えさせる	-.055	.260	.175	.284	.162	-.057		
第V因子 <こどもに積極的に関わる行動因子>								
6. 誕生日などは欠かさず何かをする	.019	.053	-.299	-.024	.604	-.086	.601	
1. 買い物などに一緒に出かける	.255	.010	.124	-.060	.578	.013		
25. 同じ趣味を持って一緒に楽しむ	-.242	-.105	.270	-.028	.571	.062		
7. 色んなところに連れて行く	-.026	.175	.046	.038	.541	.068		
20. こどもに必要以上に干渉しないようにする	-.088	.288	.231	-.161	-.389	-.223		
16. こどもと友人同士の様な関係を築く	.068	.016	.245	-.258	.320	.193		
第VI因子 <こどもの要求に応える行動因子>								
28. 何でもしてあげる	.101	.058	-.014	.062	.153	.755	.725	
34. こどもの欲しがらる物は何でも買ってあげる	-.024	-.227	.056	.165	.083	.694		
22. こどもが欲しがらる時にはお金をあげる	.035	-.078	-.077	.119	-.202	.507		
固有价值	3.650	2.817	2.582	2.571	2.335	2.363		
寄与率 (%)	11.506	10.198	5.630	4.271	3.569	3.465	38.639	

因子相関行列	I	II	III	IV	V	VI
I		-.185	.043	.251	.068	.079
II			.208	.005	.108	-.314
III				.231	.288	-.058
IV					.208	-.118
V						-.127
VI						

表4 算出した尺度得点の平均値およびSD

尺度	平均値	SD
娘		
ネガティブな行動〈6項目〉	16.286	4.463
こどもに積極的に関わる行動〈6項目〉	28.250	1.987
しつけ〈5項目〉	20.083	2.113
統制・干渉的行動〈8項目〉	23.941	3.962
受容・支持的行動〈7項目〉	27.381	3.583
こどもの要求に応える行動〈3項目〉	6.357	2.081
母親		
ネガティブな行動〈9項目〉	25.750	5.808
しつけと配慮〈5項目〉	23.714	1.917
こどもとの距離を近づけようとする行動〈5項目〉	14.738	3.523
統制・干渉的行動〈5項目〉	15.333	4.266
こどもに積極的に関わる行動〈6項目〉	22.571	3.700
こどもの要求に応える行動〈3項目〉	6.761	2.516

表5 全てのペアの標準化係数およびR² (N=84)

母親	娘	ネガティブな行動	こどもに積極的に関わる行動	しつけ	統制・干渉的行動	受容的・支持的行動	こどもの要求に応える行動
ネガティブな行動		.348**	-.074	.217 ⁺	-.017	-.208 ⁺	-.085
しつけと配慮		.159	-.031	.182	.263*	.041	.034
こどもとの距離を近づけようとする行動		-.020	-.173	-.181	-.244*	.053	.043
統制・干渉的行動		-.297*	-.012	.094	.136	-.088	.066
こどもに積極的に関わる行動		-.018	.163	-.035	.119	.167	-.210 ⁺
こどもの要求に応える行動		.084	.061	.049	.155	.112	.047
R ²		.161	.061	.102	.137	.085	.052

⁺p<.10 *p<.05 **p<.01

の子どもに積極的に関わる行動には、母親の養育行動の影響はみられなかった。娘のしつけには、母親のネガティブな行動が正の影響を与えている可能性が示唆された ($\beta = .217$, $p < .10$)。娘の統制・干渉的行動には、母親のしつけと配慮が正の影響を ($\beta = .263$, $p < .05$)、子どもとの距離を近づける行動が負の影響を与えていた ($\beta = -.244$, $p < .05$)。娘の受容・支持的行動には、母親のネガティブな行動が負の影響を与えている可能性が示唆された ($\beta = -.208$, $p < .10$)。そして、娘の子どもの要求に応える行動には、母親の子どもに積極的に関わる行動が負の影響を与えている可能性が示唆された ($\beta = -.210$, $p < .10$) (図1参照)。

【考察】

(1) 養育行動尺度の因子構造

① 女子学生の養育行動尺度の因子構造

因子分析の結果、第II因子「こどもに積極的に関わる行動」と、第V因子「受容・支持的行動」の間にやや高い正の相関がみられた。このことは、積極的に関わろうとする際には、子どもを受け入れようと思って接する、つまり、どちらの行動も子どもへのポジティブな関心と態度を前提とした行動であることを表していると考えられる。

② 母親の養育行動尺度の因子構造

因子分析の結果、因子間相関に特に目立った相関はみられなかった。このことから、そ

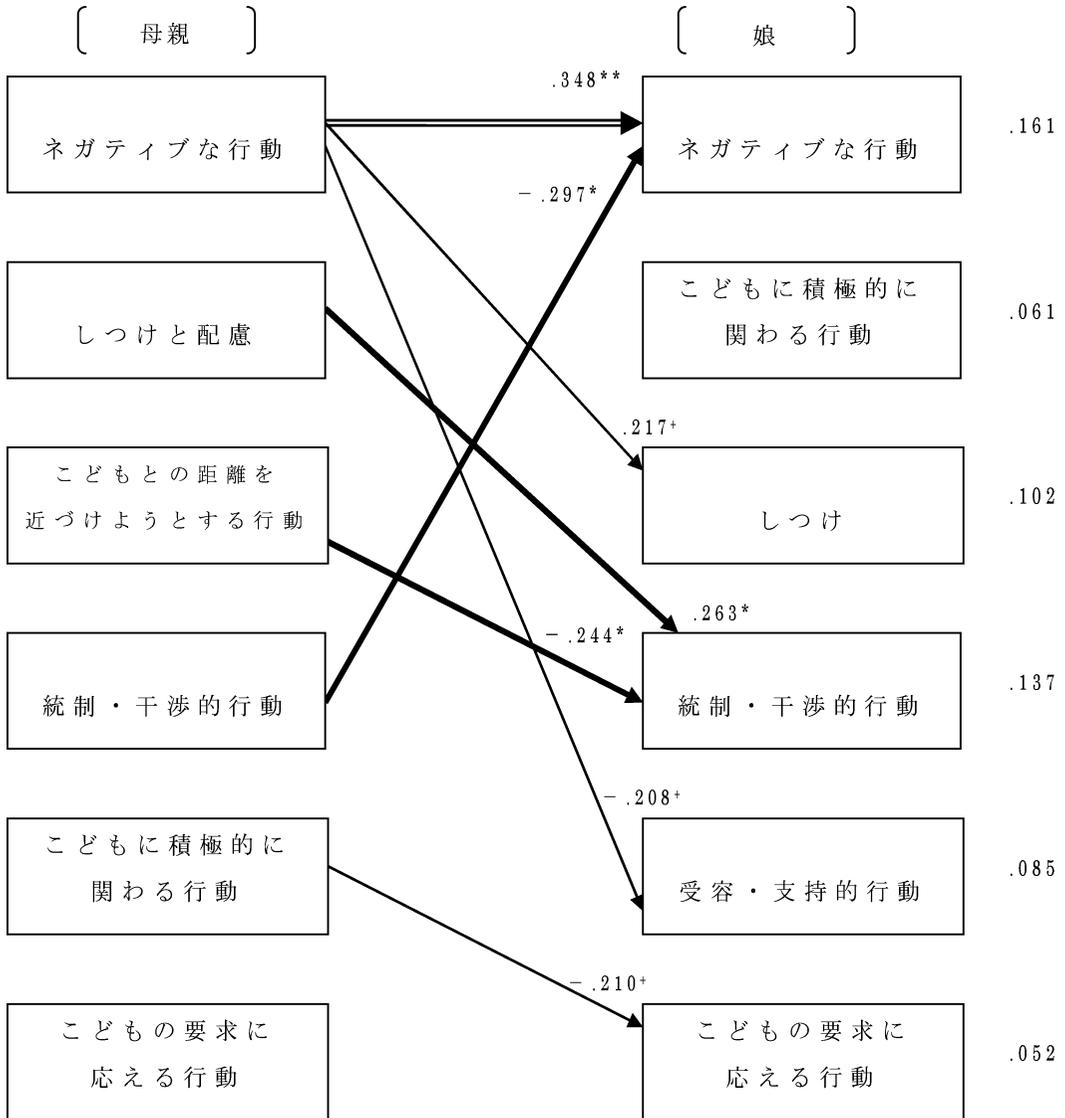


図1 全84組のパス図

それぞれの因子が独立している可能性が示唆される。しかし、被調査者の人数が十分ではないために因子構造が安定していなかった可能性も考えられる。

③ 母娘の養育行動尺度の比較

母親と女子学生の養育行動尺度の因子構造を比較すると、まず、ネガティブな行動因子の項目内容に違いがみられた。母親の方には、「子どもの考えを尊重する」、「子どもの話をい

つでも何でも聞く」という項目が負の負荷量を示しているが、女子学生にはこの項目がみられない。この違いは、実際に養育をしていくなかで、子どもの話に耳を傾けることができない場面や、子どもの考えを尊重できない場面、子どもの考えを抑えつけてしまう場面を母親が体験していることからみられたものと考えられる。つまり、実際に養育を行っているか行っていないかの違いが影響していると推測される。

また、女子学生のしつけ因子に対して、母親はしつけだけではなく、子どもに配慮する内容の項目もみられた。このしつけと配慮が同じ因子のなかにあるということは、養育をするにあたりしつけと配慮は表裏一体であることを示していると考えられる。つまり、実際に養育を行うにあたり、しつけには、子どもに何かを教え込む、覚えさせるというような母親から子どもへはたらきかけることだけではなく、子どもから母親へはたらきかける場も同時に母親が設けるようにしていることが考えられる。このようなことから、この因子についても、女子学生と母親の間で、実際に養育行動を行っているか、行っていないかの影響による違いがみられたと推測される。

そして、女子学生では、受容・支持的行動因子がみられたが、母親ではその因子はみられず、子どもとの距離を近づけようとする行動因子がみられた。この2つの因子には、「子どものどんな所でも受け入れる」、「子どもに良いことも悪いことも話す」という共通の項目がみられたが、その他の項目の内容から考えると、これらの項目に対する解釈の仕方が母親と女子学生では異なっていたことが考えられる。母親は子どものどんな所も受け入れることで、子どものことを把握できる、子どものことを何でも理解していることになると考えたのでは」ないだろうか。つまり、子どもがいつも自分の側にいると感じることができると解釈したと推測される。一方女子学生は、ことば通り受容の意味で捉えたのであろう。そして、子どもに何でも話すことは、母親はそれをする事で子どもに自分のことを理解してもらえ、子どもとの間で相互に理解ができる、つまり、より子どもとの距離が近づくと解釈したと考えられる。女子学生については、この項目を何でも話すことで子どもが自身を受容されていると感じる、つまり子ども側の目線で解釈をしたと考えられる。

以上のことから、母親と女子学生の養育行

動尺度の因子構造については、母親の被調査者の人数が少なかったこと、そして母娘の間実際に養育を行ったか、まだ行っていないかという違いによる影響がみられたために、一定の規則的な共通性がみられなかったと推測される。

(2) 母娘間の養育行動の関連性

① 母親の養育行動の影響

母親のネガティブな養育行動が、その娘のネガティブな予期的養育行動に正の影響を与えていることがわかった。したがって、母親がネガティブな養育行動をとると、その娘は将来、ネガティブな養育行動をとると予測する可能性が高くなることが示唆された。また、母親のネガティブな養育行動は、この他にも娘のしつけ行動をとる可能性に正の影響を与え、受容・支持的行動をとる可能性に負の影響を与えることが示唆された。

次に、母親のしつけと配慮の行動については、娘の統制・干渉的行動をとる可能性に正の影響を与えていたことについて、なぜ娘のしつけ行動ではなく、統制・干渉的行動に影響を与えてしまうのかとの疑問をもち、再度娘の養育行動尺度の因子構造を見たところ、しつけと統制・干渉的行動の間にやや低いが正の相関がみられた。このことから、娘のしつけ因子と統制・干渉的行動因子は、完全には独立していない可能性が考えられる。したがって、母親の配慮されたしつけを、娘が子育てをする上で必要なことであると感じ、自らの養育に活かそうとした結果、しつけと統制・干渉的行動の境界が明確ではないために、しつけをさらに強めた統制・干渉的行動に影響した可能性が考えられる。

母親の子どもとの距離を近づけようとする行動は、娘の統制・干渉的行動をとる可能性に負の影響を与えていた。このことは、母親のそのような養育行動に対して、娘が過度の統制的な態度を感じたために現れた影響では

ないかと推測される。

そして、母親の統制・干渉的行動が、娘のネガティブな行動に負の影響を与えていることについては、母親が統制・干渉的行動をとらない場合、そのような態度を娘が自身に対して無関心であると受けとめる可能性が考えられる。その結果、娘がネガティブな行動をとる可能性が高くなると推測される。この他に、母親の子どもに積極的にかかわる行動が、娘の子どもの要求に応える行動をとる可能性に負の影響を与えることも示唆されている。

これらのことから、母親がとるネガティブな養育行動は、他の養育行動よりも、その娘の予期的養育行動のうち、複数の側面に影響を与えやすいことが判明した。また、娘の予期的養育行動のうち、ネガティブな行動、および統制・干渉的行動は、母親から受けたさまざまな養育行動の影響を受けやすいことがわかった。このネガティブな養育行動と統制・干渉的養育行動は、子どもの側からするとあまり良い印象を受けない養育行動であり、そのため、まだ養育を行った経験のない娘にとっては、そのような養育行動をとるかをとらないかを考える際には、やはり自分が過去に受けた養育体験に対してどう感じたかという、母親の養育行動に対する認知が媒介していると推測される。このことは、養育行動に対する認知を取り上げ、養育行動との関連性を検討してきた先行研究（橘；2000 など）の結果を支持するものであると考えられる。

【総合考察】

これまで、母親の養育行動とその娘の予期的養育行動の間には関連性がみられるという仮説のもと、因子分析、および重回帰分析により検討してきた。

その結果、母親の養育行動が娘の予期的養育行動に影響を与えていることがわかった。その影響の間には、やはりこれまでの養育行

動の世代間伝達の研究で取り上げられてきたように、子どもの親の養育行動に対する認知が媒介していることが考えられる結果であった。母親の養育行動が、その娘の養育行動に対する認知にはたらきかけて、娘の予期的養育行動に影響すると考えると、母親の養育行動と娘の養育行動の間には関連性があると言えるのではないだろうか。

しかし、因子構造の検討においては、本研究では母娘の養育行動の間に共通性、類似性はみられなかった。これには、実際に養育の経験があるかないかによって、養育行動尺度に対する解釈が異なってしまったことが影響していると考えられる。

重回帰分析においては、母親のネガティブな行動が娘のネガティブな行動をとる可能性に正の影響を与えていたことから、伝達するまでは言い切れないが、一部の養育行動については類似する可能性も示唆されることが考えられた。

【今後の課題】

本研究では、娘の母親の養育行動に対する認知を取り上げなかったが、得られた結果から母親の養育行動は、やはり娘の養育行動に対する認知および評価を媒介として、その予期的養育行動に影響を与えていることが考えられるため、この養育行動の関連性については、母親の養育行動、それに対する娘の認知および評価、娘の予期的養育行動の3つを取り上げて検討する必要があると考える。

しかし、本研究においてもそうであるが、このような研究から得られる結果は、実際に養育を行っていない大学生を対象としているので、あくまでも予期である。特に予期的養育行動については、各々の養育に対する意見や養育方針を測定しているものと考えられる。養育方針と実際の養育態度は必ずしも同じではないことが予測されるため、世代間伝

達について、本当に関連があるのか、本当に伝達しているのかを知るためには、実際に養育を行っている母娘を対象にしなければならないであろう。

また、目的でも述べたが、養育者とその子どもという組み合わせにはさまざまなパターンが考えられるので、それぞれのパターンによって関連性が異なるのか、養育行動の認知の仕方や伝達にどのような違いがみられるのかについても検討することで、本研究とは別の視点からの養育行動の世代間伝達の特徴が、みえてくるのではないだろうか。

そして、質問項目の内容について、子どもの年齢によって回答が変化することが考えられるので、児童期や思春期などと、時期ごとにどのような関連性がみられるかを検討することで、どの時期の養育行動に最も影響を受けやすいのかということまで示唆を与えられると考えられる。

付記

本論文は、2007年度北星学園大学社会福祉学部福祉心理学卒業論文として作成したものに、加筆・修正をしたものである。

なお、この論文の内容の一部は、北海道心理学会第55回大会で発表された。

謝辞

本論文をまとめるにあたり、熱心にご指導いただきました今川民雄教授に厚く御礼申し上げます。

引用文献

- 遠藤利彦・江上由美子・鈴木さゆり 1991 母親の養育意識・養育行動の規定因に関する探索的研究 東京大学教育学部紀要 31、131-152
- 原田博子 2008 母親の養育態度に関する研究 I — 育てられ方との関連 — 筑紫学園大学筑紫女学園大学女子短期大学部紀要 3、271-283
- 児童虐待調査研究会 1985 児童虐待：昭和58年度・全国児童相談所における家庭内児童虐待調査を中心として 日本児童問題調査会
- Kaufman, J. & Zinger, E. 1987 Do abused children become abusive parents? *American Journal of Orthopsychiatry* 57, 186-192
- 木本美実・岡本祐子 2007 母親の被養育体験が子どもへの養育態度に及ぼす影響 広島大学心理学研究 7、207-225
- 厚生労働省 平成18年度社会福祉行政業務報告(福祉行政報告例)
- 中嶋みどり 2000 児童虐待の世代間伝達に及ぼす心理学的要因の検討 日本教育心理学会総会発表論文集 42、111
- 中嶋みどり 2004 非臨床群の母親における児童虐待相当行為に関連する心理学的要因の検討 広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部 53、249-257
- 中谷奈津子 2002 虐待の世代間連鎖と母親の育児不安に関する研究 家族関係学 21、153-163
- 西澤 哲 1994 『子どもの虐待』 誠信書房 pp 68-79
- 奥山真紀子 2007 精神保健疾患(虐待など)の世代間伝達 小児科 48(5)、522-526
- 田淵 創 1993 母親の養育態度に影響を及ぼす要因の検討(II) 川崎医療福祉学会誌 vol.3、No.2、35-45
- 橘 浩太 2000 親の被養育体験を媒介とした、養育態度の世代間伝達に関する検討 — 児童とその親の認知を通して — 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学 47、455-456
- 武田京子 1998 『わが子をいじめてしまう母親たち』 ミネルヴァ書房
- 東京都福祉保健局 2000 児童虐待の実態 — 東京の児童相談所の事例に見る — <http://www.fukushihoken.metro.tokyo.jp/syoushi/hakusho/0/index.htm>
- 津崎哲郎・橋本和明 2008 『最前線レポート 児童虐待はいま — 連携システムの構築に向けて —』 pp 18
- 和田秀樹 2001 『虐待の心理学』 pp 15-16、pp 59 KK ベストセラーズ
- 山野良一 2008 『子どもの最貧国・日本 学力・心身・社会におよぶ諸影響』 pp 103-114
- 全国児童相談所所長会 1997 全国児童相談所にお

ける家庭内虐待調査結果報告 全児相 62 (別冊)